

煌煌と降り注ぐ陽光は水面で跳ね返り、魚の鱗のよ
うに光を放つ。昼下がりの青天はどこまでも果てしな
く突き抜けている、かに見えて、その端にシーズナル
な入道雲を隠している。そのもと、公園の遊具の上で
は、学校のない子供が金属の熱も気にせず寄り集まっ
ている。団地のソファの上では、残された奥様が喧し
く談笑している。畑の畝の上では、腰の曲がった老人
が土を触りながら前後している。濛々とした熱気で満
ちた昼下がりの空気は、虫の音に合わせて規則正しく
鳴動している。

川沿いに隆起した土手を、その流れに沿って、一つ
の自転車が右往左往、足取り重たげに進んでいた。

車上には、三人の汗だくな人影があった。暑苦しい
草野球のユニフォームを着て、ハンドルを握る丸坊主
の少年、大介。その後ろにしがみつく辛っぱいジャー
ジ姿の少女ミホと、その姉、横向きに腰掛けて麦わら
帽子を押さえるセーラー姿のヨウコが続く。

青少年たちの体重とカゴに乗せられた三つの鞆を一
身に引き受けて、自転車は弱弱しく前進していた。ヨ
ウコが惜しげに口にしていたアイスキャンデーがち
ょうどなくなつたとき、銀色の車体は川のカーブに沿
って、ゆっくりと右方向に曲がり込んでいった。

昼下がり三様

遥 弥生

*

ある日の夕方。

キッチンで母の手伝いをしていたところに、大介くん
がふらりと家にやってきました。

ちょうど部活終わらしく、ユニフォームから覗く首
筋に汗が光っていた。

急な来訪に驚きつつ、ミホちゃんなら部屋にいるよと
伝えたら、

「ちやうんや。ヨウコ姉ちゃんのほうに用があつてん」
といわれて外に連れ出された。煮詰まったオレンジ色の
住宅街の中を、手のひらにかすかに残るトマトのにおい
をちよつと気にかけてながら、ずんずん進む大介くんの薄
汚れたユニフォームの背中を追いかけてゆく。あちこち
から、晩御飯の支度が出来たらしい、醤油やカレーの匂
いが漂ってくる。

大介くんがわたしだけを呼び出すのはとても珍しいこ
とで、少しだけわくわくする自分がいて。でも、時折湧
き立つヒグラシの声に、はっと我に返る。

近所の公園の前で、大介くんはぼたりと立ち止まった。
言い出しづらそうに、ぼそつと口を開く。

「実は、ミホちゃんのことを好きなんや」
ほらね、やつぱり。

全くの予想通りと言えぼうそになるけど、いつも三人
で過ごしていて、席を立ったミホちゃんの背中を追いか
ける大介くんの目線に、気づかないはずがなかった。

少し間をおいて、
「そう」

わたしは応援してるよ、と一言、なんでもないこと

ように応じる。

それから、ついに話してしまつたと気まずそうな大介くんに二言三言かけて、この日はそれきりだつた。

*

夜半、背中にべったりと汗が滲んで目が覚めた。回して寝たはずの扇風機はいつの間にか止まつていて、部屋の中を真つ暗な静寂が支配していた。

すつかり目が冴えてしまつた。ベッドから抜け出し、部屋の片隅の学習机に近づく。椅子に腰かけてスタンドライトの電源を入れると、儂い光が音もなく灯り、ほんのりと視界を包み込んだ。

端にある写真立てを、ぼうつと見つめる。

何年前かの、わたしたちの姿。涼しげな恰好をした、罪のない笑顔が団子のように三つ並んでいる。どこかに遊びに行ったときのものだど記憶している。あの頃、わたしたちはまだ余計な修飾なしに一緒にいられた。

けれども、今は。

夕方の大介くんの声を思い出す。好き、とか、告白、みたいな言葉を身に着けたての、またその重みも軽さもわからない様子を。

そして数秒の、残酷なほど長い互いの沈黙。あれが、わたしと大介くんの隔絶をはつきりと表していた。大介くんはもう、運命的な人間どうしの絆につける名前がわからないほどの子供ではなくて。それを無邪気に振り回す彼がはつきりと幼く映るぐらいには、わたしも大人になつてしまつていて。

肩から力を抜いて、身体に溜め込んだ空気を唇の隙間から吐き出す。耳鳴りがしそうなほどの静けさの中に、

自分でも驚くような悩ましい吐息が溶け出した。首を横に振つてから、再び明かりを消して床に就いた。

*

近所の縁日には毎年三人で行くことになっていたけれど、今年は体調が悪いからと断つて晴れ姿の妹たちの背中を見送つた。わたしの顔色の悪さを気にかけるもつかの間、いつてらっしゃいという言葉とともに駆け出していく中学生二人の背中はまだ幼い。

それでいいのだ、と思うことにして。

陽はまだ高くにある。見上げると、深く青い空のなかで一点だけの白い輝きが眼に突き刺さる。慌てて左手の甲で覆い隠し、目を細めた。あたりに満ちる草木の生き生きとしたにおいが、暖かい風に運ばれてやってきて、ツンと鼻をつく。若い、良い香りだ。けれど、その豊潤さに圧倒される。

自然の力強さに音をあげて、その場に座り込んだ。

収まりきらない胸のつかえを誤魔化しながら、これであの二人、うまくいくかしら、と年上のお姉さんらしく自分の胸に尋ねてはみるけれど、誰からの返事もない。

一人残されて、急に蝉の声をうるさく感じた。

あの子達ももっと仲良くなって、それで、私は――。

私。私は？

急に湧き出した感情のやり場を見失つて、頭を抱え込んだ。視界の明度が急に落ち込み、ずっと太陽に当たられていたせいだろう、ぼたぼたと額から水が零れ落ちてくる。

ほんの一言だけが口をついて出た。

「ああ、暑い」

*

わたしたちを乗せた自転車は相変わらずゆつたりと進んでいた。いちばん先頭で必死にペダルを漕ぐ大介くんの背中とはとてもつらそうにみえる。時折見かねて「替わろうか?」「降りようか?」と声をかけてみるが、「気にとんといて」と大介くん。「姉ちゃん、甘やかしたらいかんよ。大介、おまえしつかり漕ぎ!」とミホちゃん。どうやら、今日のわたしの役回りはお姫様のそれで、一番後ろで楽にしているとのことらしい。

仕方なく再び斜に構えて、流れとは真逆に通り過ぎてゆく川面の景色を見つめた。

儂い水の音は、耳元を切る空気と、タイヤを突き動かす自転車チェーンにかき消される。乱反射するモザイク模様のむこうに映り込む、シルバーの車体。その上には、カゴに無造作に詰められた鞆たちと、ふたりと一人の姿がある。

目を背けると、少し先の河原でじっとしている曲がつた背中が視界に入った。しばらく見つめてみると、こちらに気づいたのか、土手の方を見返してきた。

「仲良しやねえ」

眩しそうに見上げるしわくちやの笑顔がこちらに話しかけてくる。前へと進むのにな所懸命なふたりにかわつて、挨拶ばかりはしておこう、と下げた頭をもたげる頃には、遅くとも自転車、行きずりのおばあちゃんの姿はすでに後方に遠のきかけていた。

「気いつけやあ。振り落とされんようにね」

しゃがれた声は耳をかすめて消えていった。

最後の言葉を反芻しながら再び進行方向に目を戻す。

静かに自転車を漕ぎ進める少年と、その後ろであれこれと話しかける妹。ぴったりとくっついていて、ふたりの背中は遠い。

ミホちゃんが首筋の汗を手の甲で拭ったのが見えたとき、自転車は左折して川辺を離れ、畑の広がる方へと続く緩やかな上り坂に差し掛かっていった。

* *

夏休みのある日だ。

漫画を返すそうと思いい、大介の家までやって来た。

「大介、借りとったのなおしに来たでー」

声を張り上げる。大介の両親は、昼間は決まって不在にしていた。声をかけた以上は本人が出てくるだろう、としばらく待つことにして、数十秒。静かな玄関先にはミンミンゼミの音色だけが繰り返し響いており、扉の開く気配はなかった。

ゴンゴン、と間をおいて何度か戸を叩いてから、意を決し、ドアノブを捻ってこちらに引き寄せた。鍵がかかっているはずがにぎらめるつもりだったし、開いていたら、入っていても怒られやしないだろうと思っていた。

鍵はかかっていたが、扉は少し重たくて、引きずるようにして開く。部屋の中をそっと覗き込む。電気のついていない玄関は日が入ってこない作りになっている、静けさと涼しさの中に薄暗く沈んでいた。

大介の靴はたたきに散らばっていて、一応部屋にはいるらしいと分かる。ほっとして、履いてきた運動靴を近くに並べ、一段高くなっている廊下に足を差し入れる。「おらんかったら返事してやあ」

廊下をまっすぐ行ったところにある、二階へと続く階段を上る。一階にいた時には聞こえなかった、誰かと話すような声が聴こえはじめた。

テレビでも見とんのかな、などと考えながら、一階の角の部屋までたどり着く。音はともこの中から聴こえている。

囁くような声だ。

なんだか気になって、ノックもせずにそっと扉を開き、

隙間から覗き込む。

同時に、中で起きていることの意味を理解してしまっ

た。

広い部屋の真ん中に、一人かがみ込む背中。

激しく揺れる肩。

すぐそばに転がる、ティッシュ箱と雑誌。

そして、姉ちゃんの名前を呼ぶ声。

自分の頬が気温のせいではない熱を持って紅く染まるのを感じながら、慌てて扉の影に隠れる。

心臓の鼓動がうるさい。息をするのを忘れないようにしようなどと意識したのは、生まれて初めてだった。

ややあって静かになり、部屋の主が廊下に出てきた。

びしゃりと目が合う。

慌てて、二度とぶつかり合わないよう、視線を空中に

逃がす。

大介も急に叩き起こされた人間のように、声色がおぼつかない。

「……いつからおった？」

耳鳴りがしそうなほどの、騒がしい沈黙。

「いや、ついさっきや」

唾をぐつと飲みこんで答えた。

* *

「ミホちゃんは？」

花壇に水をやっていたところに、急に話を振られて驚く。夏休みだというのに、朝から炎天下をはるばる登校させられたうえに、係の仕事までやらされて朦朧としていたようだった。

「え、なにになに？」

「だからあ、」

好きな人。いないの？

「やあ……」

ジョウロをぶら下げたまま、空いている方の手で頭を

かく。中学に上がってから、周りでそういう話を聞いて

は、不可思議な気持ちになる機会が増えた。

「うち、まだそういうの、よーわからんわ」

男なんて泥だらけで汚いしな、と笑って付け加えた。

そんな子ばかりじゃないよ、といって何人かのクラスメイトの名を上げる友人の言葉を片手間に聞きながら、

ジョウロで虹をつくることに没入する。

ふいに、数日前の出来事が頭をよぎった。

……この子の言いよる〇〇君とか××君も、ああいう

ことするんやろか。

思い浮かべてみようとするが、なんだかメルヘンチックであまりはつきりと輪郭にならない。代わりに、あの一人の部屋にしゃがみ込んでいた、大介の背中だけがはつきりと焼き増しされる。

『男の子なんて、そんなもんやで』

ずっと前だ、小学校から帰って来た時に、大介がハナ

クソをほじっていることを姉ちゃんに告げたことがあつ

た。そのときの姉ちゃんの声が、なぜだかいまの友達に混じって聴こえる。

「……聞いている？」

「……ん？ ああごめん、考え事しとったわ」

「もう、変なミホちゃん」

「いかんいかん」と言いながら、ブンブンと首を横に振って向き直り、今度は友人の言葉をきちんと拝聴することにする。傾けたままのジョウロの先からはまだ虹色が流れ出ていた。

＊

びりびりとしたソースと、かき氷の甘いシロップの匂いが鼻をくすぐる。

毎年同じような縁日だけれど、変わらず多くの人でこつた返していた。

左手に焼きそばを持ったまま、行きかう人間の中をぐるぐると見渡す。数メートル先に、お目当ての買い物を終えたらしい坊主頭が見えた。

「大介——」

振り返ったのを見計らって手を振る。「おった、おった」と呟きながら、人混みを割って近づいてこようとすると、歩き回る集団の比較的少ない石段の方を指さして、そちらで落ち合おうとジェスチャーで伝えた。

人の隙間を縫うように腰掛けたところで、両手にラムネをぶら下げた大介が現れた。

「ごめん。結構並んどってん」

そっぴいながら大介が右手の一本を差し出す。「うちの子」と聞き返すと、零れ落ちるような小さな低い声で「せや」と答えがある。

ありがたく受け取って口をつけた。どんな果実にもたえられない砂糖の甘さが、舌先で泡になって弾ける。

「姉ちゃんもくればよかったのに」

「着物、せつかく着せてもらったのに、もう崩れそうや」青みがかかった瓶を見つめながらぼつぼつとつぶやくが、大介からの応答はない。

ふたりでの会話の隙間に入り込んで、あちこちの会話や、笑い、虫の音が鼓膜を刺激する。あまり

ふいに、黙っていた大介が口を開いた。

「……なあ、ミホちゃん」

話があるんやけど、という言葉に顔を向けると、そこにビー玉のような瞳がふたつあった。

急に目が合って、数日前のことを思い出す。

「いかん。」

ここから先は聞いてはならない気がして、慌てて立ち上がる。

「え、どこいくんや」

「……ごめん」

急に思い出した用事があったん、と言い残して駆け出す。待ってや、という大介の声が遠のいてゆき、やがて有象無象の話し声の中に溶けてしまった。

慣れない和服を着たせいだろうか、苦しい。人混みの真ん中で立ち止まり、手で膝を押さえて肩で息を吐いた。近くにいた中年壮年が、「姉ちゃん、大丈夫か」と聞きながら近づいてくる。

いつの間にか額に浮かび上がった汗を袖で拭って、ぼろりと声が出た。

「ああ、暑いわ」

＊

自転車は川を離れてからだいぶ経った。だからとした上り坂をようやく通り過ぎ、平坦な道に出たせいかさつきよりスピードも出てきた。しがみついている大介の身体も、ようやく呼吸が楽そうになった。

「気持ちええなあ」

「ジェットコースターや！」

と声を張り上げる。さっきまで話しかけても返事はなかった大介だったけど、今は「せやな」「おう」と軽く応じるようになっていた。

大介の身体はすぐ近くにあって、目を瞑ると心臓の鼓動が聴こえそうなほどだった。

風を切って進むこと数分。前方から軽トラックが迫ってきた。危ない、という声と共に、大介の腕がハンドルをきって自転車を路肩に寄せる。

「この暴走自転車が！ 気いつけや！」

すれ違いざまに振り返って怒鳴りつけてくる運転手。姿が見えなくなったのを確認してから「あんたがな！」と怒鳴り返すと、後ろにいた姉ちゃんから、こら止しなさい、とたしなめられた。

エンジンの音が十分遠のいてから、自転車は畑の中を再び動き出した。もう少し進むと、再び川に合流する。ここからは下り坂だ。大介の腰に回っていた手にぐっと力をこめる。とくとくと、血の流れる速度が上がったのを感じる。それがどちらの血液なのかは、果たしてわからなかった。

曲道に差し掛かる。少しだけブレーキを握り込んでから、大介の腕はハンドルの向きを右に変えた。

再び川沿いに姿を現した銀輪は、今度は勢いよく川の流れを追いかけていた。

一番後ろに横座りしている娘は、静かに川面を見つめている。

真ん中の少女は、目を瞑って先頭の少年の腰にしがみついている。

数百メートル進んだあたりでのことだった。

運転手を務める坊主頭が、進行方向に蟬の死体が転がっているのを見とめた。チリチリと弱弱しく鳴くそれをひき殺すのを躊躇って、慌ててハンドルをあらぬ方向に切る。

瞬間、三人の身体は宙を舞い、自転車と共にばらばらに土手坂に放り出された。

キヤ、とセーラー服。アホ、怪我したらどないすんねん、と叫ぶのはジャージ。野球少年は面目なきように「すまん、蟬がおってん」と己の坊主頭をさする。

ああもう、馬鹿なんやから。

まあまあ、大介くんも疲れたのよ。

散乱した荷物を拾いながら、お互いにお互い言いたいことを口にする。

日が傾きかけて、蝸が鳴き始めていた。

少年は二人に聴こえないよう、いけないまじないでも唱えるかのように独りごちた。

「暑いなあ」